

---

# 薔薇と天狼

水葉聖子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薔薇と天狼

### 【Nコード】

N0689R

### 【作者名】

水葉聖子

### 【あらすじ】

魔法王国の異名をとるウォルド王国。その北の大領主・キャメロット公爵家令嬢であるロシー又は、たぐいまれな美貌と声の持ち主だった。しかし、そんな彼女は、過去に姉を事故で亡くした悲しみから脱しきれないでいた。

町の聖堂で聖歌を歌っていたある日、町に狼が現れ騒ぎとなる。それを好機とばかりに人目を忍んで墓参りに出かけた彼女が遭遇したのは、なんと、痩せて弱った狼だった。

人をも襲うことのある狼。しかし、ロシー又はその狼に不思議な

感覚をおぼえたのであった。

## 第一話

北の大国、ウォルド王国。

大陸では『魔法王国』という異名で知れ渡り、周辺国とは一線を画した国である。

春よりも冬が長い気候ではあるが、緑豊かな大地の力は人知を凌駕する恩恵をもたらしている。その証拠に、彼の国に住む人々は、人間に限らない。

精霊が意志を持ち、人の姿をした妖精が独自の社会を築いている。また、異能力を持つ人々もおり、彼らは魔法や召喚術といった信じ難い力をふるうことができた。

しかしながら、ウォルド王国国民が皆、そうした異能力者かというところではない。大半は普通の人間であり、文化は違えど、他国の人々と何ら変わらない毎日を送っているのだ。

そんなウォルド王国の北部地方を治めるのは大領主・キャメロット公爵。

この物語は、そのキャメロット公爵の愛娘、ロシーヌ・キャメロットのささやかなある日々を綴ったものである。

\*\*\*

その日は気分が落ち込むような冬の寒空で、今にも冷たい雪がしんみりと降り出しそうであった。

ウォルド王国北部にある、小さな町の古い聖堂。広くはないが、石造りの重厚な建物に一步足を踏み入れると、少女の透き通るような美声が聞こえてきた。それは、曇天どんてんから地上に差し込む一筋の陽光を彷彿させる清浄な声で、誰もが聖堂に誘われ、歌の出所を探してしまうのであった。

歌姫は、この世のものとも思えぬ美しい少女であった。

その美しさたるや神々しく、華奢な身体からはまばゆい聖なる光が見えるようであった。

白金の髪は月光の糸のように艶やかで、背中で緩やかな波を描いている。眉目は完璧なまでに整っているが、冷たい印象はなく、子猫のような愛らしさを持ち合わせていた。なめらかな白い肌、そして冬の湖を思わせる清々しい青い瞳。

町娘とはとうてい呼べぬその容姿の持ち主の名は、ロシーヌ・キヤメロット。御歳十八になる美貌の少女は、このウォルド王国北部地方を治める大領主の娘であった。

「ロシーヌ様、温かいお飲物です。お口に合うかどうか……」

ロシーヌの美声が止むと、聖堂の下働きをしている中年の女が、白い湯気を立たせた素焼きの茶碗を乗せた盆を運んできた。貴族、しかも公爵令嬢にとっては粗末に過ぎるであろう茶碗を恥じているのか、女はおずおずと公女に歩み寄った。

女の心の内を察したロシーヌは、あえて多くの言葉をかけず、優しく微笑み礼を言うと、湯呑みを盆から手に取った。

「蜂蜜入りの葡萄酒ですね。貴重なものでしょう……」

やわらかな唇を飲み口につけ、ひと口すすると、ロシーヌはゆっくりと瞬きした。

大陸でも北に位置するウォルド王国。その中でもさらに北部にあるこの地では、多くの作物は実らない。それゆえ、町の人々にとって葡萄酒は、西部地方からわざわざ買い付けなければならない贅沢品なのだ。

その貴重な葡萄酒でもてなしてくれたことが嬉しい反面、自分は町の人々に負担となっているのではないかと不安にもなった。

そもそも、ロシーヌが町の聖堂で聖歌を歌い始めたのは、八歳の時に十二も歳の離れた姉・アレーナを不慮の事故で亡くしてからであった。

男勝りで領民の暮らしを大切に思っていた姉が、生前よくこの聖堂に足を運んでいたため、よけいに思い出深く、何とはなしに通う

ようになったのだ。幸い、歌声は透き通るように美しく、その容姿も功を奏してか町の人々に笑顔で迎えられている。幼い頃はそれで良いものだと思いきこんでいた。

しかし、年を重ね、世の中の機微を理解できるようになると、徐々に不安が胸中に広がっていった。

ロシー又は大領主の娘である。領民である彼らにとって、笑顔で迎えるしか選択肢はないであろうし、貴重な葡萄酒を出さなければならぬと思っているであろう。

自分はもう、無邪気に領民と関わっていい年齢ではなく、寂しいことだが、姉との思い出に浸ることもやめなければならぬのかもしれない。

と、暗く悲しい気持ちに沈み込みながら、温かい紅色の葡萄酒を飲み干すと、聖堂の外が騒がしくなった。

「エリー、何事なの」

様子を見に行かせた侍女が戻ってくると、ロシー又は人だからができて入る入り口付近を遠目に見ながら、期待に満ちた声を抑えきれずに問うた。生来、好奇心が旺盛で、父親のキヤメロット公爵の悩みの種の一つである。

「お嬢様。お教えいたしますが、けっしてあの人だかりに混ざろうなどとお考え召しませんように。よろしいですわね」

「あなたまでお父様と同じことを。くぎを刺してから続きを話すのだから。私は幼子わたくしではありません。自分で考えて行動します。さあ、教えてちょうだい」

ロシー又は冬の湖のような瞳にさざ波が立ち、美しく輝いた。こんな時、この女神のような美少女に抵抗できる者などいないのだ。特に侍女のエリーは、主であるロシー又と同じ年齢で、友人のような感覚も持ち合わせている。それで、ため息をつきつつも騒ぎの原因を話してくれたのだった。

「狼が町に現れたですって」

恐れるどころか、さらに目を輝かせたロシー又に、エリーが焦り

を見せた。

「狼といつても、痩せて弱っているそうだから、すぐに処分されますわ。お、お嬢様、いけませんよ。迎えの馬車が来るまで、この聖堂でおとなしくしててくださいませ。絶対にいけません。つて、お嬢様！」

侍女の制止の声もむなしく、ロシー又は長い裾の衣服にもかかわらず、早足で人だかりに向かって行ってしまった。

\*\*\*

「通していただけるかしら」

ロシー又の凜とした声が町人の人だかりの背中に向けられると、最初に振り返った中年の女がまずは仰天し、その女の声に驚いた隣の男からまたその隣へと驚きが連鎖していった。そうして、まるで潮が引くように人の群の中に道筋ができあがっていたのだった。

「狼が現れたのですって？」

人々に驚きの形相で避けられて少し傷ついたロシー又は、努めて和やかな笑顔を保ちながら近くにいた老人に訊ねた。

「おお、これはお嬢様。そうです、なにやら手負いの痩せ狼のよう。おそらく、群からはくれたのでしようが、人里に堂々と現れるとはふてぶてしい奴です。しかも、手負いのくせに逃げ足が速くて、この聖堂前を通り過ぎていったのですよ。わしゃこの目でその姿を見ましたよ」

背骨は曲がり、日に焼けた顔はしわくちやで、まるで襤褸はらのような老人は、しかし、美しいロシー又に声をかけられたことを誇らしく思ったのか、白く濁った目を大きく開いて意気揚々と答えた。

「そうだったの。まだ狼は逃げているのね」

ロシー又は老人に礼を言つと、背後に追いついてきたエリーに帰り支度をするよう指示を出した。

「ロシー又様、馬車がまだ……」

年若い侍女は困惑して言いよんだが、彼女の美しい主は待つてはくれなかった。

「寄りたい場所があります。そこまで歩いて行きますから、馬車はあとから来るよう手配してちょうだい」

「どちらへ行かれるのですか」

温室育ちの令嬢に見えてその実外見に反した機敏な動きをする主に慌てたエリーに、ロシー又は苦笑を堪えて答えた。

「お墓よ」

「お、お墓……。いったいどなたの」

「行けば分かります。町中が狼に気を取られている今なら、騒がれずに済むでしょう。幸い、狼が去っていった方向と反対ですから、襲われる心配もないでしょうし」

ロシー又の説得力ある説明に、素直なエリーはいつの間にか感心までしてしまい、月の女神のような少女に頬を紅潮させていた。

## 第二話

狼が現れたことで、にぎやかだった町の大通りは閑散としていた。それだけでなく、厚い雲が暖かな陽光を遮っている今日は、首をすくめたくなるほど寒いというのに、寂しい空気が増してしまう。

しかしそんな灰色の世界の中でも一人、春の夜空に白金の光を放つ月の女神のような少女は、毅然として目的地に向かって歩を進めていた。

「ロシー又様、あまり人気のない場所へは行かないで下さいまし」  
町の石畳に靴が当たるコツコツという音が妙に大きく聞こえ、それがよけいに不安を煽っているのか、周囲を過剰に気にするエリーが、ロシー又に弱々しい声をかけてきた。

少女らしく恐がりなエリーを気遣い、ロシー又は艶やかな唇に笑みをのせると、白く優美な人差し指を外套からのぞかせ、前方に見える鉄柵に囲まれた場所を指さした。

「エリー、大丈夫よ。狼は反対方向へ逃げたと言っていたでしょう。それにほら、ご覧なさい。墓地はもう目の前よ」

ロシー又は、気乗りしない面もちの侍女を引き連れ、迷わず広場に入ってしまった。

「お、思ったより普通の墓地……」  
広場に入ると、すぐに整然と並んだ墓石が目に入り、エリーはほっとしたように呟いた。その呟きを逃さなかったロシー又が短く笑う。

「おかしな子ね。どんな墓地を想像していたの」  
「お嬢様、このウォルド王国は不思議がまかり通る国ではありませんか。だから、死人の魂だとか、魂喰<sup>たま</sup>らいの精霊が出たりしたらどうするんですか」

不思議がまかり通る国。その言葉に、ロシー又は一瞬黙り込んだあと、うつつすらと言葉に苦悩をにじませた。

「このワールド王国は大地の大いなる力の恩恵を受けているのは確かです。でも、その力も長い時を経て弱まり、力の象徴である竜と人との交流も希薄になってしまっているのです。だから、人里に精霊などめつたなことでは現れないから安心なさい」

「でも、ドラフト卿は翼竜を飼育なさつて、五大竜と大地の力を取り戻しつつあると 申し訳ありません、余計なことを申しました」  
ドラフト卿の名が出た途端、ロシーヌの表情が曇つたため、エリーが慌てて謝罪した。

「そうね、グランスリードはやると決めたことは必ずやり遂げる人だわ。お姉様が亡くなられてもそれは変わらないのよ」

ロシーヌの美しい顔は彫像のように表情がなく硬かった。それは寒さのせいばかりではない。

グランスリード・ドラフトは、ワールド王国は西部地方を治める大領主の嫡男である。現在は足を悪くした父親の代理を務めており、事実上のドラフト公爵家当主であった。そして生きていれば三十歳の誕生日を迎えていたロシーヌの姉・アレーナと同じ年齢で、ロシーヌ自身とも親交が深かった。

そう、アレーナが死ぬ十年前までは。  
「エリー、そんなに気を遣わなくてもいいのよ。私ももう、グランのしようとしていることが分からないほど幼くはないのですから。ただ、素直になれないだけです」

そう言つて切なそうに微笑んだロシーヌは、ある墓の前で立ち止まった。

墓石には故人の名前は刻まれていない。

「ここよ。どうやら先客がいたようですね」

墓石はさほど大きくはないが、きれいに保たれており、白い薔薇の花束が墓前に置かれていた。

その花束を見たロシーヌの深い青色の瞳がそれとなく和やかになった。

「ロシーヌ様、この薔薇はアレーナ様の……」

「ええ。お姉様が好きだった品種よ。先客はきつとグランだわ」  
「でも、ここはいつたいどなたの？」

ロシー又は、侍女の問いに微笑むと、墓石を見下ろしながら静かに口を開いた。

「この墓は、翼竜の飼育に携わって亡くなった人々のものです。お姉様とグランはよくここへ来ていて、お姉様が手ずからお育てになられた薔薇の花をこうしていつも捧げておられました。お姉様が亡くなられてからは、お父様が時折いらしていたようですが、グランもなのですね」

十二歳も年上のグランスリードは、ロシー又にとつて憧れの存在であった。亡き姉もそうであったが、聡明で行動力があり、眩しいくらいに自信に満ちあふれた青年だ。

そんなグランスリードに対して、幼い頃アレーナの死を受け入れられなかったロシー又には、姉の親友である青年を拒絶していた時期がある。それからというもの、以前のように自然に接することができないでいた。

「私はいつグランに追いつけるのかしら」

傍にいても聞き取りづらくらい小さな声で白いたため息と供に愚痴を吐き出すと、ふいにエリーが喉を詰まらせたような短い悲鳴を上げた。何かとエリーの視線の先を振り向くと、そこに見えたのは、白色の毛をした野犬であった。

だが、よく目を凝らしてみるとそれは犬ではなかった。

痩せた体は通常の犬より一回りは大きく、知性を感じさせる鋭い目が冷たく光っているのが遠目にもよくわかった。

「ロシー又様……お、狼です。何故こんなところに」

恐怖で声を震わせたエリーがそう言うのも無理はなかった。聖堂で老人から聞いた話では、狼はここより反対の方向へ走っていったはずなのだから。

ロシー又は自分のわがままでエリーに怖い思いをさせてしまったと後悔した。少し気弱な彼女が、勇敢にもロシー又の前に立ち、主

を守ろうとしている。

瘦身の狼はじつと二人の少女を見定めているようであった。否、ロシーヌをまつすぐに見つめていた。それは恐怖心からくる思い違いかとも思ったが、そうではないという確信がすぐに勝った。

「何故そんな目で見るの」

「何をおっしゃっているんです。どうかお逃げ下さい。このエリーがお嬢様をなんとしてもお守り申し上げます」

ロシーヌの呟きが理解できなかったエリーが勇ましく強い口調で言い放ったが、ロシーヌはその冬の湖のような瞳で狼を見ずにはいられなかった。

そうこうしているうちに、狼の体がわずかに動いた。それに驚いたエリーは、とっさにロシーヌを抱きしめ、狼に背を向けた。

喰われる。そう覚悟を決めた時であった。

「エリー……エリー」

狼から目を逸らさずにいたロシーヌが、自分に抱きついて震えている侍女の背中を優しく叩いた。

「お、お嬢様、狼は？」

「ごらんなさい」

ロシーヌはそつとエリーから体を離すと、狼がいた方向を見るよう侍女に促した。

「し、死んでいるのですか」

エリーがそう表したとおり、狼はその身を苔がはびこる土の上に横たえていた。

餓死だろうか、それとも重傷を負っていたのか。

「よ、良かったですね。とにかく誰かに伝えて処分してもらいましょう」

しかし、額の冷や汗を拭うエリーに反して、ロシーヌは狼に歩み寄っていった。

「お嬢様。何てことをなさっているんですか！」

「大丈夫よ、死んでいるのか確かめるだけです」

「そんなことなさらなくても」

叫び声を上げんばかりに慌てた侍女に、ロシー又はそれ以上にも言わなかった。

生死の確認というのは方便であった。おそらく狼は死んでいない。そうロシー又は直感していた。

あの狼は私を待っている。

白金の豊かな髪が、不意に吹いた冷たい風に揺らされた。ロシー又は薄紅色の唇を引き結び、狼に一步一步踏みしめるように近づいていったのだった。

### 第三話

ロシーヌが町から戻ると、キヤメロット公爵の城は騒然となった。というのも、痩せて薄汚れた狼が運び込まれたからだだった。

狼はロシーヌの有無を言わせぬ命令により、即座に彼女の自室に運ばれた。そうして、温めた山羊の乳と、火を通した牛の肉を食べさせると、弱々しかった狼の瞳に少しずつ生氣が戻り始めたのだ。

しかし、狼はまだ体が思うように動かせないのか、とてもおとなしい。ロシーヌは恐れもせず傍らに寄り添い、汚れた体をその白い手で優しく撫でてやっている。

その様子を真つ青になつて見守るしかなかった侍女のエリーは、侍女頭に呼び出されたかと思うと、嵐の夜の雷鳴にも似た怒声で叱責された。

「お前は、有事にはロシーヌ様をお守りする立場にあるのですよ。それは、主が自ら危険に晒されようとするのをお諫めすることでもあるのです。それをなんとのことですか。こともあろうに、人に害なす狼を拾って帰るとは……！ エリー、お前はしばらく自室で謹慎とします。わかつたらお行きなさい」

「あの、でも、あの狼は……」

エリーが恐る恐る言いかけたが、怒りで目を血走らせた侍女頭に睨まれ、それ以上何も言えなくなつてしまった。

エリーはロシーヌが心配で仕方がなかった。それは、狼を城内に連れ込んだからではない。いや、あれは狼などではないのだと思っている。

人型に変ずる狼など、それはもうただの狼ではないのだから。

\*\*\*

暖炉にくべた薪が橙色の炎の中ではぜる音が大きく聞こえた。

毛布で作った寝床の上で疲れたように目を閉じて動かない狼を撫でているうちに眠ってしまっていたロシーヌは、ふと目を覚まして息をついた。

「夢ではなかったのね」

辺りを見回すといつもの自分の部屋である。薔薇の香りがほのかに漂う、きれいな居心地の良い部屋だ。幼いころ、姉のアレーナが本だらけの自室と比べてよく褒めてくれたことを思い出した。しかし、ロシーヌは姉の古い紙の匂いがする部屋のほうが大好きであったことをよく覚えている。

姉は男勝りで、刺繍針の代りに細剣レイピアを持ち、恋よりも夢と友情を大事にしていた。

姉の夢。それは、希薄になってしまった力の象徴である竜と人との交流を取り戻すこと。それにはまず人から離れていった巨大な翼竜の飼育方法を確立させることだ。翼竜が人と共にあれば、精霊使いとそれを守護する五大竜がウォルド王国の力になる。

「大人は躊躇して誰も試みようとしなかったけれど、アレーナお姉様とグランスリードは違う」

信じ続け、アレーナがいなくなった今もグランスリードだけは戦い続けている。そして、彼らを後押すかのように、その試みが無駄ではないことが証明された。

そう、五大竜の中でも風を司る竜に選ばれた精霊使いが現れたのだ。

グランスリードはまっすぐに正しい道を進んでいる。

では自分はどうだろうか、いつもここへ思考は辿りつくのだ。そうして、答えがない己を嫌悪してしまう。

「狼さん。私の勝手にここに連れてきてしまって、迷惑だったかしら。でも、あなたも私を呼んだわよね。そうでしょう」

ロシーヌの膝もとで目を閉じていた狼が、うつすらと目を開けた。「あら、目が覚めたのね。気分はどうかしら。怪我はしていないよ

うで安心したわ。もうおなかは空いていない？」

艶やかな唇に笑みをのせ、白金の髪を揺らして小首を傾げるロシーヌをじっと見つめる狼の静かな瞳。その黄金色に輝く瞳に吸い込まれそうになり、ロシーヌは慌てて目を閉じた。

この狼は普通の狼ではない。一瞬ではあるが、人間の青年の姿に変じたのだ。

不思議がまかり通る国・ワールド王国。

魔物か、それとも神の御使いかはわからない。

それでもロシーヌは、正体不明のこの狼との出会いに新しい変化を感じずにはいられなかった。

やがて、次に目を開けたときには、狼はまた眠りについており、暖炉の炎に焼かれた薪が崩れ落ちる音がやけに大きく聞こえたのであった。

## 第四話

キヤメロット公爵家に狼がいることは、たちまち主でありロシー又の父親でもあるセルヴィル・キヤメロットの知るところとなった。しかし、公務のため滞在先の王都シャロンを離れることができず、代わりの人物がロシー又のもとへ遣わされた。

「グランスリード……」

ロシー又が客室に入ると、一人の青年がにこやかな表情で歩み寄ってきた。

騎士らしく片膝を床につき、恭しく公爵令嬢の白い手を取り口づけると、そつなく立ち上がった長身が少女を見下ろすことになった。グランスリード・ドラフト。

ウォルド王国は西部のベルド地方を治める大領主の嫡男で、足を悪くした父親に代わって大半の公務をこなす貴公子だ。日々多忙なはずのこの青年が、なぜキヤメロット公爵家の、しかも私事に関する呼びつけに応じたのか。それは、父親同士が旧知の仲であるというだけではなかった。

「ご機嫌いかがかな、私の美しい薔薇」

本質を鋭く見抜く青灰色の瞳に、めったに他人には見せない親しみの色が浮かんだのだが、それに気づいてもロシー又は素直に喜ぶ様子はなかった。

「お世辞を言いに来たのですか」

心にもないことを言ってしまった、とは極力表情に出さぬよう気丈に振る舞う美少女に、グランスリードの双眸の光がさらに和らいだ。

「あなたの美しさを世辞で褒める者がいるとは思えませんね。本当に美しいのだから」

グランスリードの真意を計りかねたロシー又がこらえきれずに切り出した。

「グラン。我が父セルヴィルが、多忙なあなたを突然呼び立てた非礼はお詫びいたします。でも、狼のことなら、私はけっしてあの子を処分したりはしないことを、今ここではっきりと申し上げておきます」

経験や知識、そして判断力の何もかもがグランスリードにはかなわないと承知しているロシーヌの、精一杯の反抗だった。

しかし、ロシーヌは知らないのだ。世間では冷徹な態度を崩さぬ氷の貴公子とまで言われているグランスリードの唯一の弱点が自分であるということ。

「こんな損な役回り　セルヴィル殿を恨みたいよ」

グランスリードは苦笑して溜め息をついた。それとともに、いんぎん慇懃な口調も消え、幼なじみらしい空気が戻り始めた。

「きみにそんな厳しい目で見られるのは、王都のうるさいお歴々の小言を聞くよりこたえる」

「グラン、私はそのようなつもりは……」

「分かっている。まあ、さすがの俺でも、きみが狼を拾ったと知らされたときは驚かすにはいられなかったが。今は、きみに拾われたその幸運な獣を一目見たいと心から思っている。許してくれるか、ロシーヌ？」

頼もしい青年の申し出に、ロシーヌが否と答えるはずもなかった。ロシーヌはほんの少し萎しおれていた心が潤うのを感じながら、グランスリードを自室へと自ら導いたのであった。

## 第五話

キヤメロット公爵の城は北部地方の寒さに対応した造りのため、厨房や使用人の居室がある一階部分以外には廊下というものがなかった。適当な広さの個室が連なり、目的の部屋へ辿りつくにはいくつもの小さな扉を開かなければならない。

扉の開閉を先導役の使用人に任せて歩くロシー又の後ろにグランスリードの姿を認めた侍女頭やそのほかの人々は、明らかに安堵した表情をして二人を見送った。主が不在である今、もつとも頼りになる人物が夏の涼風のように城の空気を一変させたのだ。

自室で謹慎を言い渡されていた侍女のエリーも、こっそりとロシー又達の後ろ姿を見送りながら傍にいた年上の侍女に問うた。

「幼いころから家族ぐるみのお付き合いとはいえ、ドラフト公爵様はご多忙なのになぜ来て下さったのですか」

侍女頭に大目玉をくらったエリーがめげていない様子を見た先輩侍女が苦笑いして答えた。

「グランスリード様は、それはもう今は亡きアレーナ様に負けないくらいロシー又様を可愛がっておいでなのよ。今は少しロシー又様が頑なにいられているから、表には分からないけれど。それに、この時期は必ず墓参りの後に城に立ち寄られているわ。ロシー又様には告げずにね。あなたはロシー又様と一緒にだから知らなかったですよ」

「では、城主様もご存じなのですね」

「そうよ。今回は偶然、狼騒動があったから、こういう状況になったの」

エリーは納得したと大きく頷きながら、心の中でため息をついた。ロシー又はグランスリードに対して素直になれないと言っていた。本当は、兄またはそれ以上に慕っているのに。

ロシー又はその容姿に違わぬ美しい心根をした少女だ。願わくは

彼女の想いが明るい出口を見つけられるよう手助けができれば、と思うエリーであった。

いくつもの部屋を通り過ぎると、やがて心安らく花の香りがするロシーヌの部屋へと到着した。

部屋の主である美少女は、ためらいもなく異性であるグランスリッドを招き入れた。

使用人は下がらせたというのに、だ。

幼いころはよく出入りしていたため、おそらくはその癖が残っているのだろう。

「グラン、この狼です」

優美な白い手を少し上げ、暖炉の前でおとなしく眠っている白い毛皮の獣を指差した。

グランスリッドはロシーヌに軽く笑みを向けると、痩せた狼の近くに歩み出て、すぐに品定めするように凝視した。横顔で見える灰色の瞳は暖炉の炎に照らされてもなお冷ややかで、それはロシーヌがいつも彼を遠くに感じる一瞬でもあった。

「私にはこの狼が害をもたらすとは思えません」

たまらなくなつてそう静かにもらす少女に、顔を上げた青年は張り付けたような笑顔で問うた。

「何か ほかに変わったところはなかったか」

ロシーヌは心臓が跳びはねるかと思うほど驚いたが、努めて冷静に否定した。

「……いいえ。どうしてそのようなことを聞くのですか」

「いや、変わった狼だと思ったただけだ。普通は人間に警戒心を抱くものだが、それが感じられない。かなり賢い狼なのか、それとも

「

「それとも？」

「狼の姿を借りた人外の存在かもしれないな」

どうしてグランスリードという人物は、こつも鋭いのだろうか。

と、小さな怒りすら感じるほど驚愕したロシーヌに、追い打ちをかけるように青年貴公子が言った。

「ロシーヌ、この狼は俺が預かる」

「グラン、突然何を言い出すのですか」

当然、ロシーヌは抗議の声を上げたのだが、グランスリードは決して譲らなかつた。

そんな青年の身勝手な態度に、キヤメロットの薔薇と称賛されるロシーヌの顔が怒りで紅潮した。

「グランスリード・ドラフト。あなたにこの狼の処遇を決定する権限はありません」

「落ち着け、ロシーヌ。この狼は」

「私は、いつまでも自分の行動に責任を取れない子どもではありません。お父様もあなたも……勝手に何でも決めないでください！」  
怒りで大声を上げた本人が、頭の中がどうにかなくなってしまったのかと思うほど目を丸くしたが、次には悲しそうに表情を歪めて両手で口を覆った。

「ごめん、なさい。わ、わたくし……」

取り乱したことを謝罪しようとしたロシーヌを、グランスリードは静かなまなざしで見つめ、これ以上興奮させぬよう優しく声をかけようとした時であった。

『呼べ　我を呼べ』

頭の中に直接語りかけるような声があった。やや低い、静かな、しかし心が清められるような澄んだ声。

とつさにグランスリードが厳しい表情で周囲を警戒した。ロシーヌを引き寄せ、守る体制になる。

「誰だ」

部屋には二人しかいない。となると、声の出どころとして思い当たるのは、足元にいる獣だけだった。

『我を求めし者、我もまたそなたを求め』

再び『声』が頭の中に響くと、声の主はおのずと判明していた。眠っていたはずの狼が身を起こし、いつのまにかロシーヌを見上げていたのだ。

その強く輝く瞳には理知的な意思が宿り、見る者の魂を奪いそうな力さえ感じられた。

「ロシーヌ、見てはいけない！」

グランスリードが鋭く言い放ったが、すでに遅かった。

「あ……」

短い声を残して、ロシーヌはその場に崩れ落ちてしまったのだ。た。

## 第六話

気を失って倒れたロシー又は、見知らぬ風景の中で目を覚ましていた。

ゆっくりと上半身を起こして周囲を見回すと、何もかもが水晶のように透明な、十八年間の人生の中で見たことも聞いたこともない場所であった。

そこはとにかく広々としていた。鳥が自由に飛べるほど高い天井に、それを支える太い柱が等間隔にはるか先まで並んでいる。空気はひんやりとしており、人の足音一つ聞こえない空間は、寂しさを感じさせる一方で、心に静かな安らぎをも与えていた。

ロシー又が目覚めたのは、床よりも数段高い所に設けられた大きな台の上で、どうやらここは城の一室というよりは神殿のような場所であることが認識できた。

「異界へ来てしまったようですね」

そう独りごとを呟いたロシー又は、自分が意外にも冷静な心持であることに驚いていた。

確かに、魔法王国ワールドに生まれ、翼竜も風の精霊も見たことがある。しかし、さすがに異界に迷い込んだ経験はないのだ。もっと取り乱すかと思っていたのだが、意外である。これもフランスリードの影響のたまものであるうか。

「そういえば、衣服も変わってしまったなんて、本当に不思議ね」

自分自身に目を向けると、気を失う前に身に着けていた毛織物ではなく、まるで夜着のように薄い生地の服であることに気付いた。

見知らぬ生地の手触りは絹に近くさらりとしており、上品な光沢がある。大きく開いた袂たもとが、これに似た衣装をワールド王国の聖職者らが着ていたことを思い起こさせた。大胆にも背中の部分に殆ど生地がなく、白くなめらかな肌が露わになってしまい赤面したロシー又だったが、長い白金の髪でなんとか覆い隠せることに思わず感

謝してしまった。

「それにしても、私はいつたどこにいますというのかしら」

自室で狼の金色の瞳を見て、グランスリッドが珍しく切羽詰まった声で何か言っていたのは覚えていたが、誰に連れられて、どのよう<sup>う</sup>にここへ来たのか記憶がない。

まずは動いてみるしかないだろう。

そう思い立ち、数段ある階段を降りて歩を進めようとした時であった。

ふと、太い柱が立ち並ぶ、外部の光も見えないはるか先から、大きな翼を広げた鳥が滑空してくるのが見えた。その鳥が徐々に近づくにつれ、それが鳥ではないことが発覚した。

燕のごとく空を切ってロシーヌめがけてやってくるのは、背中に大きな翼を生やした人間と同じ体型の存在であった。

衝突する　と、思わず身を縮めたが、翼を生やした者は、器用に空気を抑え込むように羽ばたくと、ふわりと床の上に降り立った。「ロシーヌ・キャメロット、私の顔を見忘れたか」

翼人は、優しい高めの青年の声でそう少女に話しかけた。

その声に、恐る恐る顔を上げたロシーヌは、すぐに目を見開いて短く声を上げた。

「……あの狼さん？」

そう、墓地で拾ったあの白い狼だ。狼は一瞬だけ人の姿に転じたのだが、まさに今、目の前にいる青年と同じ容姿をしていたのだ。

眩しいほどの白に近い金色をした髪は、ロシーヌの白金のそれよりもさらに淡い。肌も抜けるように白く染みひとつないが、血の気もなく、どこかそら寒さを感じさせる。

しかし、瞳だけは煌々と濃密な金色に輝き、人間の瞳にあるべき瞳孔が見てとれず異様な気を醸<sup>醸</sup>していた。

「我が名はルーセム。この<sup>せいてんきゅう</sup>聖天宮が主、聖天使・ダニエル様に仕えるもの」

長身のグランスリッドよりもさらに額一つ分は背の高い青年は、

表情に乏しい抑揚のない口調で素性を明かすと、ロシーヌの白い手を取った。

見知らぬ異世界での驚愕の再会。動揺を隠せず揺れている冬の湖のような青い瞳を覗き込んだルーセムが目を細めた。

「お前はダニエル様の魂の器に相応しい」

ルーセムの金色の瞳を恐れたロシーヌは、とっさに手を振り切つて後退りした。

「聖天宮とはこの世にあるのですか。それに、聖天使・ダニエルとは何者です。魂の器とは何のことか説明なさい」

両手を胸元で握りしめ、恐怖しながらも状況を把握せんと勇気を奮い立たせる少女に、ルーセムが折りたたまれていても肩幅を超える大きな翼を揺らして歩み寄った。

「近寄ることは許しません」

少々語気を強めた命令に、翼の青年は歩みを止めた。ほんのわずかだが、眉が下がったところを見ると、困惑しているようだった。

そして、思案して口をつぐんだかと思うと、やがて再度話し始めた。

「ウォルドの民は、天空界を忘れてしまったのか」

「……天空界」

「そうだ。ウォルド王国の、いや、この世の天空を統べる世界のことだ。翼人ウイングマンはお前たちの隣人であつたはず」

つばさびと。

その聞き覚えのある言葉に、ロシーヌははっとなった。

「翼人は伝説の人々ではなかつたのですか」

そうだ、翼人は天の使い。彼らは書物でしか見たことがない架空の人々だと思つていた。翼人の末裔だという人物の話しも聞いたことがあるが、作り話だと決めつけていたのだ。

「神竜の加護をいただく公爵家の末裔が嘆かわしい。大地の力が弱まったのもうなずける」

「失礼な。翼人を見た者がいないのですから、どう信じるといふのです」

そう口にしたところで、ロシーヌの脳裏に亡き姉・アレーナと、グランスリードの顔が浮かんだ。彼らは、誰もが諦めていた翼竜との信頼関係を取り戻すため行動し、その努力に報いるかのように、風の守護竜と精霊使いが現れたのだ。

「風の守護竜と共に風の精霊使いが現れた。となれば風竜ふうりゅうが復活することもあり得ぬ話ではないぞ」

風竜は、ドラフト公爵家を加護する神竜と言われている。

ルーセムは、地上の世情を心得ているのか、逃げるロシーヌを追い詰めてさらに続けた。

「頑ななキヤメロット家の末裔よ。お前には言っただけ聞かせても心から信じることができないようだ。ならば我が見せてやろう。この天空界 スフィアを」

ルーセムの言葉が神託のように重みを増したかと思うと、ロシーヌの体はあっさりと青年の腕に抱き上げられた。

絶句した少女にも構わず、ルーセムは翼を羽ばたかせると、聖天宮を文字通り飛び出していったのだった。

## 第七話

ロシーヌが自室でグランスリードに拾った狼を見せた際に意識を失ってから一日が過ぎていた。

キャメロット公爵の城では、意識のないキャメロット公爵令嬢・ロシーヌが横たわる寝台の傍に身を置くグランスリード・ドラフト公爵の姿があった。

瞼を閉じたままのロシーヌの美しい顔を見つめる彼の表情は氷よりも冷たく、そして嵐を呼ぶ黒雲のような怒りとも殺気とも思える気が背中から立ち昇っている。今、この青年に話しかけることができるのは、彼の付き人であるアルス・デュエルしかおらず、食事から着替えの用意まで、普段は使用人にさせることまでこなしていた。

アルス・デュエルは、中肉中背に人の良さが窺い知れる丸いまなこをした童顔の青年だ。本来はグランスリードの付き人ではなく、ドラフト家が編成する『翼竜隊』よくくりゅうたいのうち、おもに騎乗用翼竜の飼育と訓練を管轄とする第四級翼竜隊の副隊長をしている。だが、あまり剣を閃かせる騎士という印象はなく、進んで雑用をしても走り回っているその屈託ない人柄と働きぶりから、自然にグランスリードから声をかけられ、その結果、外出先にまで同行することになるのだった。

「グランスリード様、昨日から水すら口にされていませんから、せめてこれだけは飲んでください」

銀杯を乗せた銀の盆を持つ姿が妙に似合うアルスが、臆することなく銀杯をグランスリードに差し出した。振り返ったグランスリードの青灰色の瞳が部屋の温度を下げたと錯覚させるほど冷たかったが、それでもアルスの言うとおりに銀杯を受け取った。そして、飲み口に顔を近づけたところで、ぼそりと呟いた。

「この甘い匂い……」

ロシーヌが倒れてから一言も口を利かなかったグランスリードが

やっと声を出したことにほっとしたのか、アルスは胸を反らして笑顔で返した。

「そうですね、デュエル家直伝の滋養粥ですよ。今回は特別にたっぷりと蜂蜜を入れましたので、きつと頬が落ちるほどおいしいと思います」

「何が直伝だ。麦と薬草と果物を山羊の乳でドロドロに煮込んだだけだろうが」

「いいえ、蜂蜜も入っています。ああ、グラン様は大人ですから、葡萄酒でもお入れたほうが良かったですでしょうが」

悪びれずにニコニコとしているアルスから、「文句を言わずに飲め」と言外に命令する気迫が感じられたため、グランスリードは自分が主であることを忘れ、甘過ぎる薄緑色をした銀杯の中身を、眉間にしわを寄せながらも飲みほした。

「ありがとうございます、グランスリード様」

「いや、こちらもお前に心配されるようでは、まだまだ未熟だった」主従関係にあるばかりか、年齢もアルスのほうが若干低い。それなのに、たまにその立場が逆転することがある。それでもグランスリードはアルスを同行させるのだ。それがこの二人の関係であった。「話しは変わりますが、グランスリード様」

主から空になった銀杯を受け取りながら、アルスが真剣な口調で切り出した。

「ロシー又様はいつたいどうされたのでしょうか。狼もすっかり弱って、眠ったままですし」

アルスの言うとおり、白い狼は暖炉の前に設えられた寝床で死んだように眠っていた。

グランスリードは再びロシー又に視線を戻し、ため息を堪えた重苦しい口調で話した。

「これは俺の推論だが、ロシー又は異界に魂を連れて行かれたのだろっ」

「異界……」

「この狼に宿っていたのは異界の住人の魂だったとして、選ばれたロシーヌは魂だけ連れて行かれた」

「そんな。異界に住む種族と言え、神族と有翼人です。でも、今ではこの魔法王国でも伝説と化しているのではなかったのですか」

「ああ、確証はない。だが、このウォルド王国と大地の力の繋がりを風の精霊使いが証明してくれたことを鑑みると、あながち俺の推論が的外れとも言えないだろう」

グランスリードは、ゆっくりとロシーヌの卵のようになめらかな曲線を描いた頬に手を伸ばした。暖炉で燃える炎に照らされた寝顔は血の通わぬ人形にも見えるが、かえってその美しさに神秘的な色を添えていた。

そうして、グランスリードの指先が、ロシーヌの頬に触れそうになった時であった。

「あつ」

驚きの声を上げたアルスと同様、驚きに目を見開いたグランスリードは、思わず身を乗り出していた。

「ロシーヌ？」

意識を失っていた少女は、その冬の湖を思わせる清々しい青い瞳を見せた。目覚めたばかりでぼんやりとしているのか、無言で何度か瞬きをすると、瞳をめぐらせて周囲を見回した。

グランスリードとアルスは固唾を呑んでロシーヌの様子を見守っていたが、次に耳にした言葉によって絶句した。

「ここはどこだ。そなたたちは誰ぞ」

ロシーヌの姿をした何者かが、そこにいたのであった。

## 第八話

「ルーセム、見て」

背中が大きく開いた衣服にも関わらず、大胆にもロシー又は白金の髪を両腕でかきあげた。女神の彫像のようになめらかな曲線を描いたその肢体は、艶めかしさを超えて神々しくすらある。北国の中でも北部地方に住まう彼女が、このように素肌を露出することはなく、さらに、父親であるキャメロット公爵を筆頭に、侍女頭からも服装には細心の注意を払うよう言い含められていた。それは、美しすぎる少女の貞操を守るためでもあったのだ。

だが、異世界である『スフィア天空界』に魂を連れてこられた今、彼女を縛るものは何もなく、まるで幼い子どもに戻ったかのように屈託ない笑顔を満面に浮かべ、翼人である青年・ルーセムの名を呼んだのであった。

ロシー又が頬をバラ色に紅潮させて背中を見せると、肩甲骨から真白い鳥の翼が現れた。

翼は今の少女の気分を表しているかのように数回楽しげに羽ばたいた。

「私は今、魂のみの存在ですから、このような信じがたいことまできてしまうのですね」

宝石にもまさる青い瞳は喜びに満ちており、そんなロシー又の姿を見て、表情に乏しいルーセムの金色の目も優しく細められた。

「ロシー又。お前の心はその翼と同じく真白く穢れがない。やはりダニエル様の魂の器に相応しいだろう」

聖天宮で目覚めたときにも同じことを言っていたと、ロシー又は小首を傾げてルーセムに問うた。

「その……聖天使・ダニエル様の魂は、永遠に私の体に入ったままなのですか。そうなれば、私はいつたいていどうなってしまうのでしょうか」

ふと不安の色を表情に浮かべたロシーヌの胸中には、まっ先に青色の瞳をした不敵な表情が良く似合う青年の顔が浮かんでいた。

グランスリッドに会えなくなってしまうのかと思いきや悲しくなったロシーヌの柔らかな頬に、ルーセムの白い手が伸びた。

「案ずることはない。ダニエル様が地上にいる間だけのこと。そうしなければ、お前の肉体が衰弱してしまう。器に相応しいというだけで、やはりお前の体はお前自身の魂のものなのだから」

「そうなのですか」

「そうだ。だから、お前はこの天空界にいる間は、心安らかにして過ごせばいい」

ロシーヌはルーセムに微笑むと、後ろを振り返って天空界の風景を眺めた。

聖天宮の入り口から見えるその光景は、水晶を切り出して造られた美しい球体模型のような世界であった。地上のように平面ではなく、前後左右、そして上下全てが翼人の居住空間なのだ。

はるか前方に、聖天宮のような建造物が点在しているのが見えるが、そこまで伸びているのは、やはり透明な細い道だった。それはどうやら歩くためのものではなく、止まり木のような役割をしているのか、時折、この世界の住人たる翼人が降り立ってはまた飛んでいく姿があった。

「まずはこの世界を知りたいと思います」

もう一度ルーセムを振り返ったロシーヌは、グランスリッドのためにも、ただ無為に時間を過ごしてはならぬと気持ちを新たにしたのであった。

## 第九話

北国のウォルド王国の中でも、西部に位置するベルド地方は『風の大地』と称されるほど風と縁の深い土地だ。最も風の精霊に愛され、その恩恵を受けた人々は北国にあつても穏やかな気候の中健やかに暮らしていた。

そのベルド地方を治めるのは、大領主・ドラフト公爵である。

現在、当主であるベルメール・ドラフトは両足の不自由を理由に、そのほとんどの権限を嫡男であるグランスリードにゆだねている。

当主代理とはいえ、グランスリードは三十路になろうかという年齢で、すでに四大公爵家の中でその存在感を大きくしていた。その理由は、風の守護竜と風の精霊使いを復活させたことにある。

大地の力が弱くなった昨今のウォルド王国は魔力の低下が著しく、魔術師はもちろんのこと、精霊使いや召喚士の数が激減していた。国力の象徴である神竜を守護竜に戴く四大公爵家にあつても、各々の守護竜を単なる『伝説の生き物』としてしまうありさまだ。

しかし、彼だけは違っていた。冷静に現状を把握すると、大地の力を取り戻すため、力の象徴である翼竜を飼育し、人との関係性を再び取り戻すことを決め、実行したのだ。

その結果、彼の大事な親友であり同志でもあった、ロシーヌの姉・アレーナを失ってしまったが、今でもグランスリードは心折れることを自ら許さず、前へ進み続けている。

その強靱な精神力を自負していたはずの貴公子は、今、草を食む馬の首筋を撫でている少女の後ろ姿を、寂寥感を面に滲ませてじっと見つめていた。

目を覚ましたロシーヌが別人となつてしまっていたあの晩、侍女頭に事情を説明しただけで、王都にいるキャメロット公爵の許しを得ることなくドラフト家へと連れ出すことを独断した。少しでも目

を離したくないというグランスリードの気持ちを理解し、また、現時点で彼の傍にすることが最善であるという賢明な侍女頭のはからいで、眠ったままの狼共々、こうして目の届く場所にいるわけだが、実際には、どのようにしてロシーヌの魂を呼び戻すことができるのか全く分からなかった。

やがて、穏やかな陽光が降り注ぐなか少女の白金の豊かな長い髪が揺れ、白い肌の美しい横顔が見えると、グランスリードは表情を改め、にこやかに歩み寄った。

「ロシーヌ、いや、聖天使・ダニエルだったか。馬が珍しいか」  
そう問いかけると、ロシーヌの体を借りた聖天使・ダニエルは、青い瞳を輝かせ、笑顔で肯いた。最近のロシーヌがけっして見せてはくれなかった表情だ。

「珍しいといえば珍しいな。地上に降りるには、私の魂の器となる者が必要であったから、こうして直に触れることができたのも久方ぶりなのだ。グランスリードよ、翼竜隊なるもの、大変興味深い。そなたが私をここへ案内してくれたことを嬉しく思う」

グランスリードは大きなため息をついた。

「何だ、私は何かそなたを落胆させるようなことをしたのか」

「いいや。ただ、その口調はなんとかならないのか。あなたがロシーヌの体を借りていることを知っている俺は良いが、ここの第四級翼竜隊の連中が聞いたら混乱する。それでなくてもその美貌がかなり目立つのだからな」

「では全て話せばよい。ここは魔法王国ウォルドぞ。有翼人の存在くらい心得ておろう」

気楽な物言いのダニエルに、グランスリードは呆れて肩をすくめた。

「今のウォルドは、かつてあなたが見知っていた頃のものとは違っている。風の精霊使いが珍しいくらいなのだから」

「……なるほど。どうりで私の器が見つからないはず。それにして

もこの少女は逸材だ。魂に穢れがないばかりか、聖属性の波動を感じる。居心地が良い体ぞ」

わざとだろつか、ダニエルが片眉を跳ね上げ、グランスリードをからかうように見上げた。当然、青年貴公子は苦々しい表情でそれを見下ろす。

「ロシーヌの魂に穢れがないことくらいこの俺が一番よく知っている。願わくは、あなたがその大事な魂の汚点とならないうちに、本人に体を返してほしいものだ」

グランスリードは本心からそう言っていた。ロシーヌが生まれた時から知り、その成長を兄のように見守ってきたのだから。その彼女が、自分の知らない表情を目の前で見せていることは、思った以上に堪えられない現実だった。

「天からの客人を追い出そうとは、まったく不遜極まりない。そなた、このロシーヌを一番知っていると申したな」

グランスリードの発言に少々気分を害したといった口調で、ダニエルは青年の胸に人差し指で触れ、優しく微笑んだかと思うと引導を渡すかのように無表情になってこう言った。

「ロシーヌを一番理解しておらぬのはそなたぞ」

## 第十話

聖天使・ダニエルに肉体を貸してから昼と夜を何度か繰り返した頃、背中の大きな翼を器用に使いこなして天空界スフィアを飛び、そこに住まう人々の様子をつぶさに観察するロシーヌの姿があった。ここには彼女の自由を縛るものは何もないのだ。

しかし、すでに白金の髪をした少女は天空界において広く周知されるところとなっていた。聖天使・ダニエルの器たる人間があまりにも美しいばかりか、その魂がまったく違和感なく異界に馴染んでいたからだった。

そのロシーヌに静かにつき従うのは、金色の瞳の青年・ルーセムだった。彼はこの天空界で聖天使・ダニエル付きの要人として知られているのか、飛びまわる先々で人々から深々と頭を下げられた。

このことに驚いたロシーヌは、人ひとり分ほどの幅しかない止まり木のような細道に降り立ち、無表情な連れの青年を見上げた。

「ルーセム、あなたって何者なの」

ロシーヌは、いつもの公爵令嬢としての毅然とした表情ではなく、あどけない少女の素顔を出会って間もないルーセムに見せて問うた。

「我は聖天使・ダニエル様にお仕えする者だ。先刻説明したはず」

「そうではなくて。この天空界でどのような存在なのかということよ」

なぜロシーヌが唇を尖らせたのかと少々首を傾げたルーセムは、軽く頷いて再度口を開いた。

「聖天使・ダニエル様は、この天空界を統べる光の神・ルーフ様をお支えする四大天使の一人であらせられる。そのお方に付き従う者の中で、我は第一の位をいただいている。だから皆は我を敬うのだ」

「四大天使……。私たちと似ているわね。我が家は四大公爵の中でも地竜を守護竜に戴いています。聖天使様は何を司っておられるの」

「ダニエル様は導きの光の天使。そして正義をも司る清廉なるお方。この天空界と地上を導く大切な役割を担っておられる」

ルーセムは己が主を心から慕っているようで、ふと和やかな表情を見せた。

その青年の様子に、ロシーヌの心も和やかになった。自分と同じだと思ったのだ。グランスリードの力になりたいと強く願う気持ちだ。  
が。

「本当に大切なお方なのね」

短い会話を終えて一息ついたところで、ロシーヌが再び別の場所へと飛び立とうとすると、一人の翼人がふらふらと数十歩ほどの距離の場所に降り立ち、そのまま膝をついてうずくまってしまった。

驚いて駆け寄ったロシーヌが声をかけようとする、背後で先にルーセムが口を開いた。

「璞玉はくぎよくが無いのだな」

「……ル、ルーセム様」

顔を上げた翼人は少女で、ロシーヌと同じくらいの年頃なのか、侍女のエリーを思い出させるような善良な面持ちをしていた。しかし、その顔色は不健康に青白く、よく見れば額に汗が浮かんでいる。少女の傍らに膝をついたロシーヌは、具合の悪そうな背中にと手当てながらルーセムを見上げた。

「こちらの方は大丈夫なのですか。どこか休める場所にお連れしたほうが良いのではないですか」

ロシーヌの申し出に、ルーセムはうつすらと口の端を引き上げて満足げに頷いた。

「ではこの者を聖天宮に連れて行こう。ダニエル様の御魂の器たるお前が許せば、だが」

「愚問です。それから、彼女を休ませたら璞玉についても説明して下さいね」

他人を助けることに躊躇ちゅうちゆのない、しかしながら探究心もしっかり見せるロシーヌに、ルーセムは返事の代わりに少女の髪を軽く撫で

たのだった。

## 第十一話

水晶のように透明で、静謐な美しさを誇る聖天宮せいてんきゆうに戻ったロシー  
又とルーセムは、璞玉はくぎよくを失い倒れかかっていた翼人の少女を共に連  
れ帰り別棟で休ませた。

聖天宮には、数日前にロシー又が目を覚ました場所である祭壇の  
間のほかに居住空間が別棟として建てられており、こちらは大理石  
によく似た滑らかな石で造られていた。

「ルーセム、璞玉とはなんですか。それがなかったために彼女は具合が  
悪いのですね」

寝台で辛そうに眼を閉じている少女を心配そうに見下ろすロシー  
又が問うと、小間使いに何やら指示を出していたルーセムが振り返  
って歩み寄ってきた。

「璞玉とは、我ら翼人の命とも言えるもの。そして、それは地上に  
降りることではしか得ることができないのだ」

ルーセムが白い手を己の胸に当てる仕草をしてみせた。どうやら  
璞玉とは、翼人の体に宿るものらしいことがロシー又にも理解でき  
た。

「地上に？ では……その地上に降りることができずにいる彼女に  
は、魂の器となる存在がいないのですね」

幼いころから察しの良いロシー又は、何とはなしに事態を把握す  
ることに長けていた。天空界という異界に來た今も、普通ならば、  
地上に住む人間にとっては未知の物である璞玉を理解することすら  
難しいのだが。

穢れなく美しい心根の持ち主であるということのほかに、柔軟な  
思考力を持つロシー又だからこそ、ダニエルの魂の器に選ばれたの  
であろう。

横たわった少女が呻き声を上げると、ロシー又は少し焦りを含ん  
だ口調で言った。

「地上に降りることができれば、回復するのですか」

「そうだ。大地の力を璞玉に蓄え、翼人はこの天空界で生きている。お前たちの世界で言う食事と同じと思っただろう」

「では、地上に降りるために、彼女に束の間その体を貸すことができる人間を探せばよいのですね」

わかりました、と、頷いた曇りのないロシーヌの瞳は、人ならざるルーセムの金色の双眸をまっすぐに捉えていた。

その強いまなざしに思わず気圧されたルーセムが一瞬言葉を失ったところに、白金の髪的美少女は威厳ある主の風格さえも垣間見せて告げた。

「聖天使・ダニエルに、私の体を返すよう取り次ぎなさい」

ロシーヌはゆっくりと立ち上がった。

「地上へ戻ります」

## 第十二話

西のベルド地方を治める大領主・ドラフト公爵といえは『翼竜隊』である。

魔法と神秘の国、ウォルド王国にしか生息しない、蝙蝠こつせりの翼に蜥と蜴かけの身体を持つ生物・翼竜。その大きさには二通りあり、一つは騎馬を一回りほど大きくした四肢の長い翼竜・リンドブルム、そして、もつとも飼育が難しいとされる、まさに飛行する巨大蜥蜴。翼竜と言えば通常はこちらを差すだ。

腹に毒袋を持ち、その唾液は鋼をも溶かす。そんな恐ろしい特性とは裏腹に、非常に敏感で繊細な翼竜は、人間に対する警戒心も強い。常に世話をする飼育員でさえ、恐慌状態に陥った翼竜によって命を落とすことも珍しくないのだ。

そんな危険生物の飼育をするのは第四級翼竜隊で、ドラフト公爵家嫡男グランスリード自らが身分を問わず集めた人員により編成されており、軍隊のような厳しい規律や貴族の気品とは無縁だが、翼竜を飼育するために必要な知識と能力を備えた集団であった。

その第四級翼竜隊の敷地であり、土埃と動物臭がする翼竜の厩舎には、ここ数日、月の清らかな光をまとった女神のような美少女が通うという異様な事態に見舞われていた。

美少女とは言わずもがな、ロシーヌのことである。厳密には、その魂は今、聖天使・ダニエルのものであったが。

「グランスリード、今日も翼竜の厩舎へ参るのか」

第四級翼竜隊舎へ向かうべく、館の外に姿を現したグランスリードをいち早く待っていたのは、ロシーヌ・キャメロット公爵令嬢だった。宝石にも劣らぬ冬の湖を思わせる青い瞳は好奇心に輝き、人形のように白い肌と白金の艶やかな髪が晴天下で光を放っている姿は人とも思えぬ美しさである。

「今日は大人しくしている。絶対に館から外に出るな」

にべもなく言うグランスリードは、遠慮なく苦々しい表情をロシーヌの中にいるダニエルに向けた。もともと青灰色の鋭い目つきが、伶俐で冷たい印象を与えるというのに、眉間にしわを寄せると、石にされてしまいそうな迫力がある。しかし、そこは人ならぬ聖天使、ロシーヌらしからぬ薄笑いを以って返した。

「裏表のない人間だな、そなたは」

あまり見たくないロシーヌの表情に、グランスリードは長靴の留め金の具合を見る振りをして視線を逸らした。

「これ以上、第四級翼竜隊の者たちに疑惑を持たれては困る」

「何を隠す必要がある」

「アルス 馬はまだか！」

グランスリードがとうとうダニエルを無視すると、周囲で固唾を飲んでいた使用人たちの空気が凍りついた。ドラフト家に仕える使用人たちは、ロシーヌの魂がダニエルと入れ替わっている事実を、一部の者を除いてはつきりとは告げられていない。当然、ロシーヌをこの上なく大切に扱ってきたグランスリードのこの態度は驚愕に値した。

冷たい怒りの目をした青年の横顔に、目を細めたダニエルは不満げな口調になった。

「そなたはなぜそう怒ってばかりおるのだ。何がいけない？ 勝手に翼竜に乗ったことか、それとも、勝手に第四級翼竜隊の者たちに接触したことか。見るがよい、ロシーヌのこの身体には傷一つ付いておらぬぞ」

勝手に、というところに罪悪感がないダニエルに、グランスリードはしかし、何も言わなかった。なぜなら、彼の危惧はダニエルの行動にはなかったからだった。

グランスリードは、ここ数日、聖天使の食事の様子を見て危機感を覚えていた。

有翼人の中でも高位であるダニエルだからかどうか知る由もないが、彼女は用意された食事にほとんど手をつけなかった。それでも

ダニエルは何も変化を訴えることはなく、おそらく人間の食事は有翼人には必要ないのだということが想像できた。

しかし、身体は真正銘、人間であるロシーヌのものだ。その彼女の顔色が最近芳しくない。このままでは本当に生死にかかわることになるだろう。

「聖天使・ダニエル」

少々疲労感を滲ませた声のグランスリードは、前髪を重たそうにかきあげた。無駄とは思いつつ、ダニエルに問うた。

「あなたはいつ、ロシーヌに身体を返すつもりだ。……おい」

すぐに返答があつておかしくないこの状況で、ダニエルからは何の反応もない。訝しんだグランスリードが、眉をひそめて再度声をかけようと口を開いたその時であった。

「どうやら、そなたの要望はすぐにでも叶えられそうだぞ」

聖天使・ダニエルは、冬の清々しい青い空を見上げた後、グランスリードの青灰色の瞳をまっすぐに見つめ、悪戯を成功させた子どものように無邪気な笑顔を見せたのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0689r/>

---

薔薇と天狼

2011年11月28日00時46分発行